

正義について

高野 長英



目に余る行為

正義を考えるのに、反対の事例から考える。

どんな時正義感がわき上がるか。

目に余る行為を見たときだ。

ハリケーンカトリーナで災害に乗じて値上げをした商人たちに、国民が怒ったと言う。

この怒りは何か。

人には「ずるさ」に対する感知器が備わっているかのようだ。

誰もがずるい行為を考えることはある。

自分が迷うことがあるから他人のそうした行為を敏感に察知する。

そこから怒りが来るのだ。

「弱いもの」を「叩く」ような行為を見た時

人は怒りを感じる。

これはほぼ共通して言えることだ。

だから正義とは「保護する本能」「弱いものを守りたい本能」

「父性母性本能」に関連するものだととりあえず言っておく。

弱いものを救いたいのか

人は弱いものを救う本能があるだろうか

子供や老人は守りたい。最近は逆のことが起こるのだが。

健康な男女ならそういう本能がある。

だからアフリカの飢えた子供の写真を見せられると、

誰もが何とかしたいと一瞬だが思う。

そのあと「自分には何もできない」と思ったり

小額でも（多額の場合もあるかもしれない）寄付をしようかと思ったり

後はその人の現実の状況に応じて変わってくるだろう。

だがそういう心理は大体共通してあるわけだ。

なかなか一方で、自分の疲労の具合とか、社会の中での力量とか、

そんなことで彼が行動できるレベルは変わってくる。

たまには何も感じない人もいるだろう。不幸な生い立ち、

裏切られ続けて世界を信じなくなったり

寄付の広告を見過ぎて食傷気味になる人、

あるいは自分が大事で第一の人もいる。

公正さ、バランス

弱いものが叩かれるのは公正でない

だから腹が立つのではないか。

強いものが戦うときは腹が立つことはない。

(ただ戦争はできるだけ避けるべきだと言う考えがあるが)

だから公正さが正義の一要素だ。

バランスが取れていることが人には大事なのだろう。

これは最近だと

金持ちからはたくさん税金を取れと言う議論になる。

ここはアクチュアルにこれからもめるだろうところだ。

アメリカや外国では散々やっている。

どの程度が適当か、落とし所かということだ。

平等といってもみんなの収入をぴったり同じにすることが

平等とはならないだろう

たぶん働く人には多めに、怠けものは少なめとなる

そのあたりがバランスの話で

感性の話になってくる

図形を描いて三角形の美しいバランスはいかに

黄金比はこのあたりか

そんな話になる

キリストの正義、仏教の正義

一神教の世界観は、我々にかなり大きな影響を与えている。

昔、多神教の時代、人びとの正義は「目には目を、歯には歯を」だった。

だから争いが絶えなかった。

最初の一神教が仏教で、身分制などに悩んだシャカ国の王子が、インドの森の中でさまざまなことを考えた。

殺生を、対人間だけでなく食べ物、動物に対しても無駄に殺すのはやめろと戒めるのはかなり革命的なのだ。

そのあとキリストが「右の頬を叩かれれば左の頬を差し出せ」と説いた。

キリストにせよブッダにせよ、その言葉に何か人の胸を打つものがあった。

だから世界中に広がって多くの信徒を生んだ。

いずれにせよ復讐、報復を禁じたのだ。DMだが、

この考えが現代に与えている影響ははかり知れず大きい。

日本はアメリカと並んで先進国で唯一死刑を続けているが、ヨーロッパはやめてしまった。

新聞などで今朝7人の死刑が執行されたなどという記事を読んだとき、なにか変な気分、

たとえ殺人犯でさえ、国（国民）の手で殺したという事実の不気味さに違和感を覚える我々だ。

この違和感は、学校や社会で、人は殺してはいけないと教わり、それが今の社会の根底原理になっているからだ。

正義の観念に、一神教が与えている影響は大きいのだ。

たとえば我々が「あいつは悪人だ。あいつを私的に成敗しよう」

と制裁を加えると、

日本では我々が罪に問われます！

これは日本が法治国家だから。

私的制裁は許されません。

むしろ私的制裁はよくある悪の一パターンとしてある。

先日もある少女が不良グループに殺されてしまった。

「ヤキいれよう」ってやつ。